

T. シブタニの準拠集団論の可能性（2006年度シカゴ社会学研究会報告資料）

著者	桑原 司, 奥田 真悟
雑誌名	Discussion papers in economics and sociology
巻	901
URL	http://hdl.handle.net/10232/8097

シカゴ社会学研究会第55回例会、 於：京都私学会館、2006年12月27日。

報告 桑原 司「T・シブタニの準拠集団論の可能性」（奥田真悟と共同作成）

問題関心

ブルーマーとイリノイ学派（J・D・ルイス）との論争^{*1}よりブルーマーが導き出した命題を発展させる方途を探ること。

上記論文の論争のテーマ：シンボリック相互作用論は主観主義か否か

ルイスの批判（Lewis,1976）

プラグマティスト	主観主義（名目論）	ジェームズ、デューイ、ブルーマー
	客観主義（実在論）	パース、ミード



ブルーマーの反論 四つの命題（Blumer,1977）^{*2}

- ① 人間の「行為」（action）とは、「社会」への適応（fitting）である
- ② 人間は、それに先だって「パースペクティブ」（perspective）を獲得しなければならない
- ③ 「他者たちの集団」（group of others）からパースペクティブを獲得する
- ④ パースペクティブは、その人間の行為を方向付ける

*1 Lewis,J.D.,1976,The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism,Sociological Quarterly,17:347-359=Hamilton, P.(ed.), 1992, George Herbert Mead Critical Assessments, Vol.2, pp.137-151 ;Blumer,H.G.,1977,Comment on Lewis, Sociological Quarterly, 18:285-289=Hamilton(ed.),1992,pp.151-157.

*2 桑原 司、2000年、『社会過程の社会学』、第1章（<http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor1.htm>）を参照。

命題 ①	"Society as Symbolic Interaction" (Blumer,1962=1969,ch.3) ^{*3} ・ 行為とは社会への適応であり、社会とは、他者たちによる「進行中の相互作用」 ^{*4} (ongoing interaction) を指す。それ故、人間は行為するに際しては、必然的にその他者から制約を受ける → 「適応」の内実とはいかなるものか？ (=疑問A)
---------	---

命題 ② ③	・ 「他者たちの集団」とはそもそも何なのか？ (概念規定) (=疑問B) ・ パースペクティブを獲得、とあるが → どういう風に (いかにして) 獲得するのか？ (=疑問C)
--------------	---

命題 ④	・ 方向付ける、とあるが、 → どのようにその個人を方向付けるのか？ (作用) (=疑問D)
---------	---

疑問A～Dについて、シブタニ^{*5}の「準拠集団」(reference group) 論をもとに、一つの回答を試みたい。

シブタニの論文の検討に入る前に、ブルーマーとシブタニの相違点について、簡単に整理しておきたい。 ↓

ブルーマーとシブタニの集団概念規定——共通点と相違点——

共通点	集団≠パースペクティブ	ブルーマー、シブタニ
相違点	集団=実体的な他者の集まり	ブルーマー
	集団=実体的な他者の集まり、想像上の実体、パースペクティブ (に関する内的・外的言説)	シブタニの準拠集団論

*3 Blumer,1969,Symbolic Interaction,Perntice-Hall.

*4 ブルーマーにおいて、必ずしもこの相互作用の内実が詳細に概念化されているわけではない。当初この概念の詳細な明確化を図るために、山口健一氏 (山口健一、2005年、『鏡と仮面』におけるパーソナルな行為者の名づけと用語法の「共有」——A・ストラウスの相互行為論を基礎として——)、『社会学研究』第78号、東北社会学研究会、119 - 136頁；山口健一、2006年、「社会的世界と相互行為の接点——A・ストラウスにおける集団とパーソナルな行為者の行為との関係から——」、『社会学年報』第35号、東北社会学会、99 - 119頁) との共同研究を企図していたが、諸般の事情により、順延と相なった。

*5 周知のように、シブタニはブルーマーの直系の弟子にあたり (船津 衛、1976年、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣、第2章、第2節)、そのことは、ブルーマーも (Blumer,1969,viii)、またシブタニも (Shibutani, T., 1988, Herbert Blumer's Contribution to Twentieth-Century Sociology, Symbolic Interaction, 11:23-31) 認めている。



- ・ブルーマーもシブタニも集団とパースペクティブを区別している点は同じ。
- ・準拠集団としてどれを重視するかが異なる。
準拠集団に“想像上の実体”、“パースペクティブ（に関する言説）”を含めているか否かが異なる。

**Shibutani, T., 1962, Reference Groups and Social Control,
Rose, A.M. (ed.), Human Behavior and Social Processes,
Routledge & Kegan Paul, pp. 128-147. *6**

「もしある人が彼の仲間と歩調を合わせていなければ、多分それは、彼が別のドラマー
〔＝準拠集団〕を聞いているからであろう」（1962, p. 129）。

→ シブタニがソロー^{*7}の有名なくだりを引用したもの。

- ・ドラマー＝「準拠集団」
- ・引用の目的・・・人間が完全に社会から孤立しているという極端な主観主義的議論を避けるため

このような極端な非同調の場合は、より頻繁に見られる人間の多様なあり方の研究の出発点を与える。慎重にであれ、直感的にであれ、または無意識的にであれ、どの人もある種の観客のために演技している。社会生活のドラマにおいては、劇場においてそうであるように、行為はある人々に向けられ、その人々の判断は重要だとみなされている。我々の社会のように複雑な社会においては、その中にはとても多くの観客がいるが、個人の行動を理解可能なものにするためには、演技する人が誰に向けて演技しているかを見分けることがしばしば必要になる。準拠集団概念の目下の普及度は、はっきりと舞台には登場していない観客に向けられた行動を説明する際の、その概念の有用性に部分的には依拠している（1962, p. 129）。

*6 なお、この論文は、Shibutani, T., 1955, Reference Groups as Perspectives, American Journal of Sociology, 60:562-569, をシブタニ自身が改訂したものである。1955年の論文の邦訳については、<http://space.geocities.jp/issn03890104no54/YAKU-Shibutani-1955.pdf> を、1962年の論文の邦訳については、<http://space.geocities.jp/issn03890104no54/YAKU-Shibutani-1962.pdf> を参照されたい。

*7 ヘンリー・デイヴィッド・ソロー（1817 - 1862）アメリカの作家、思想家、詩人、博物学者。
If a man does not keep pace with his companions, perhaps it is because he hears a different drummer. Let him step to the music which he hears, however measured or far away.

-- Henry David Thoreau

準拠集団には、	準拠集団の構成要素	} が含まれている。
	①実体的な集団	
	②想像上の実体	
	③パースペクティブ (に関する言説)	

準拠集団の機能	①「観客」→社会統制 ⇒ 自己統制 = 行為の試金石
	②パースペクティブの獲得源 (前述)

…シブタニは、

- (a) 観客に帰属されたパースペクティブ
- (b) 観客を構成する人々それ自体

→ 両者の区別をすることによって、上記の課題（「準拠集団」を軸概念とすることで近代大衆社会における社会統制の有り様を解明すること）にうまく取り組むことができる、と述べている。

パースペクティブ

・シブタニ

W・I・トーマスの見解^{*9}を引用しつつ、

個人が持つパースペクティブが、個人の状況の定義の如何を決定し、状況の定義の如何が個人の行為のあり方を決定する、としている。

↓

ブルーマーの「シンボリック相互作用論の三つの基本的前提」^{*10}の第一前提と同様の主張

・キー概念としてのパースペクティブについて

パースペクティブとは、個人の世界に関する体系化された見方であり、すなわち、種々の対象、出来事、そして人間性の諸特性についての自明視された見方である（1962,p.130）。

これは、シブタニの有名な定義である^{*11}。

*9 中野正大、宝月 誠編、2003年、『シカゴ学派の社会学』、世界思想社、246 - 254頁。

*10 Blumer,1969,p.2.

*11 ちなみに、網掛け部分の原語は、関係代名詞“what”である。本来ならば「もの」ないしは「事柄」と訳すべきであるが、この訳語がこの文脈において適切な表記とは思われない。ちなみに、片桐雅隆も、この“what”を「見方」と意識している（片桐雅隆、1995年、「現代のシンボリック相互作用論者——シブタニ」、船津 衛、宝月 誠編、『シンボリック相互作用論の世界』、恒星社厚生閣、53頁）。

個人がこのパースペクティヴによって捉えた種々の事柄の体系

→ その個人にとっての「環境」(environment) (ブルーマーの言う「世界」(world)) を構成する。

シブタニにとって環境とは

環境	・実際に存在する事柄	} 双方を含む
	・「想起され、予期された事柄」	

人間がそうしたパースペクティヴを持つことによって

存在可能性 …何が存在していたか、または何が存在し得るか (生じ得るか) に関する予測	行為の可能性 …何を行い得るかに関する予測
に関する種々の前提を持つことができる。	



すなわち、アルフレッド・シュッツの言う「自然的態度」(natural attitude; natürliche Einstellung) を可能にする、ということの意味していることは、シブタニの次の叙述からもわかる^{*12}。

そのような秩序 [=パースペクティヴ] なしでは、人々の生活は混沌としたものになるだろう。すなわち、疑問の余地のない準拋枠の中でさえも、疑念が生じ得ることになってしまう。そのようなパースペクティヴを持つことは、永遠に変化する世界を相対的に安定して、秩序立った、予測できるものとして人々が捉えることを可能にする (1962,p.130)。

個人のパースペクティヴとは、実際に経験するに先立ってその経験を定義し、方向付ける大まかな図式のことである。最も重要なことの^{一つは、個人がある人の自明視している事柄について知ることができる、ということである} (1962,p.130)。

すなわち、パースペクティヴが、個人の経験に対する予期と、他者の予期に対する予期の双方を可能にする、ということである。

人々が一定のパースペクティヴを共有することで、一つの社会的世界が成り立つ、とシブタニは考えている。

また、共有されているパースペクティヴのあり方が、その「社会」のあり方を決定する。



人々の「協調行動」(concerted action) の総体

*12 シュッツとシブタニの類縁性については、片桐雅隆、1982年、『日常世界の構成とシュッツ社会学』、時潮社、第8章を参照。

・シブタニ

共有されたパースペクティヴ＝「文化」(culture)と呼んでいる。
この「文化」が人々に「似通った活動のパターン」を可能にする。

異なるパースペクティヴを持つ人々は、同じ状況を別様に定義し、彼らの環境が持っている多様な側面に対して選択的に反応する。スラム街を歩く売春婦とソーシャルワーカーとでは各々異なった事柄に気付く(1962,p.131)。



この引用から言えることは

- ① 人によって持っているパースペクティヴが異なりうる。
- ② パースペクティヴがその個人に選択的な反応を行わせる。
- ③ 従って、同じ状況でも、個人のパースペクティヴの如何により、その側面の選択、その定義のされ方が異なる。

パースペクティヴの変化はそれがどのようなものであれ、…人間に、以前は見落としてしまった事柄に気付かせたり、また同じよく知っている世界を違った見方で見せるようになる(1962,p.131)。



この引用から言えることは

- ・人間が何かを知る＝その何かに適用されるパースペクティヴを獲得すること、を意味する。
- ・そのパースペクティヴが変化する＝新たなことを、ないしは既存の事柄をより良く、もしくはより悪く知ること、を意味する。

ところで、

人々は動機が異なっても、協調行動を行うことができる。

↓ なぜか？

- ・彼らが「一般化された他者」(generalized other)の役割を取得しているからである、とシブタニは述べている。
- ・同時にシブタニが主張する準拠集団の二つの側面^{*13}のうち、(a)に相当する。

「一般化された他者」の観点から	
↓ 他者の定義	↓ 自己の定義
他者に関する予期	自己像の形成

*13 (a) 観客に帰属されたパースペクティヴ

(b) 観客を構成する人々それ自体

協調行動において、個人は〈他者に対する予期〉の検証結果をもとに、〈自己像〉の修正を図る。この自己像の修正が個人による自己コントロールを可能とし、その結果として

不適切な衝動を抑え、その結果として好ましい方向に自らの行為を導く（1962,p.132）。



- ・この意味での自己コントロール＝シブタニの言う社会統制の内実
- ・その意味での社会統制→社会の存立を可能にする。

明らかにシブタニは、準拠集団という概念を（a）に限定して用いるべきであることを強く主張している*14。

次に、個人が何らかの自己像を形成する、という営みについて考えてみたい。

自己像の形成とは、その個人が自らを「どのような種類の人間とみなすか」、それを決定すること⇒自分自身を既存の種々の「社会的カテゴリー」*15に位置づけること。

準拠集団の概念は、いくつかの方法で用いられてきたが、その有用性はその概念が、次のような集団を意味するときに最大化され得る。すなわち、その集団において当然視されているパースペクティヴが、ある行為者によって、その行為者の知覚領域を組織化する際に準拠枠として用いられているそのような集団である（1962,p.132）。



このように定義することで、あらゆる種類の単位が準拠集団として機能し得る、ということが言えることになる。

また、準拠集団は、組織化が高度に進んだ集団に限定されるべきでない点もシブタニは強調している。

演技するある人にとって観客は、一人の人間、その人が接触を保っているほんの一握りの人々、有志団体からなるかもしれないし、または社会階級、職業、エスニックグループ、

*14 お気づきのように、シブタニが「パースペクティヴとしての準拠集団」と言うとき、その「パースペクティヴ」には、①パースペクティヴそれ自体と、②パースペクティヴに関する言説の二つが含まれている。シブタニがどの文脈において前者を使い、どの文脈において後者を使っているのか、に関する検討については、Shibutani,1955の検討をもとに、今後の課題としたい。

*15 社会的カテゴリーとは「職業とか、性別といった一定の客観的な標準（属性）に従って分類された複数の人々を指す。教員・農民・サラリーマン・男性・女性などのように、彼ら自身の間には何の接触も主観的親近感もなく、一つの操作概念であるという点が、集団や団体といった実在概念とは異なる」（濱島 朗他編、2005年、『社会学小辞典』、有斐閣、260頁）。

何らかのコミュニティといったある種の広いカテゴリーの人々から構成されるかもしれない。準拠集団は観客で〔も〕あり、それは、現実や想像上の擬人化された人々から構成され、その人々には一定の価値が帰属されている。準拠集団とは、その人々の前である人が、彼の地位を維持したり高めたりしようとする観客である（1962,p.132）。

シブタニにとって、

「準拠集団」＝人がそこからパースペクティヴを獲得するような集団（前述）

パースペクティヴ	(a) 観客に帰属されたパースペクティヴ
集団	(b) 集団を構成する人々それ自体 …実在する集団に限定されるわけではなく、そこには人々の集まり以外に種々のカテゴリーや、想像上の人々もまた含まれる。

そうした意味での準拠集団は、それを構成する人々にとって

- ・パースペクティヴの獲得源
- ・自己を評価する基準（行為の試金石）

図A参照

過去数十年の間に突然準拠集団に対する関心が寄せられてきた（1962,p.133）。

その理由は、大衆社会の独自性にある、とシブタニは述べる。

すなわち、

①	「社会はマスメディアを通じて互いに結びつけられている」（1962,p.132）。
②	「〔大衆社会〕における彼らは実際、特定の文脈における無数の個人的つながりや、倫理的義務 ^{*16} によって相互に結び合わさっているのである」（1962,p.132）。
③	「大衆社会は多元的である」（1962,p.132）。

このような複雑な社会において人間は、時には現時点で表向きには参与していない集団であったり、時には彼らとその集団の成員であると認識されていない集団であったり、時には現実に存在していない集団の規範に従うこともある（1962,p.132）。

このような大衆社会においては、個人は様々な集団を準拠集団とし、こうした複数の集団に、同時に帰属している、とシブタニは考えている。すなわち、ルーマンの言う「脱中心化された社会」^{*17}という視点に、シブタニも既に気づいていたことがうかがえる。

*16 「愛情と考慮を伴って扱われてきたと感じる人々は、たいてい個人的な義務をあらゆる状況における拘束力を持った実体とみなし、それに従わないことが困難だと思っている」（1962,p.141）。

*17 佐藤 勉編、1997年、『コミュニケーションと社会システム』、恒星社厚生閣、418 - 422 頁を参照。

ところで、準拠集団論には、その機能に関する二つの捉え方があるが、

規範機能 (normative function)	個人が自分や他人を評価する際に、その個人に準拠枠を与える機能。
比較機能 (comparison function)	人々に、ある特定の判断基準を与える機能。

そういった二つの機能の双方をも統一的に説明し得る第三の視点をシブタニは提示しようとしている^{*18}。

問題点

先にシブタニは、「準拠集団」をパースペクティブに限定すべきであると強く主張していた。しかし、これまでの定義からするならば、準拠集団には、パースペクティブと集団の双方が含まれていなければならない。またそうでなければ、準拠集団にはパースペクティブの獲得源と自己評価の基準という機能を持たせることができない。思うに、シブタニの「パースペクティブ」には二つの意味が含まれている。一つは人々が共有しているものの見方それ自体。もう一つは、ものの見方に基づいて、あるいはものの見方について人々が行っている相互作用——自己相互作用・社会的相互作用——（内的・外的言説）。この二つが含まれているように思われる（より拡大解釈するならば、そこにはブルマーの言う、「物的・社会的・抽象的対象」の三つが含まれることになる）。

シブタニの社会観

社会はコミュニケーションにおいて、そしてコミュニケーションを通じて存在する
(1962,p.134)。



すなわち、社会はコミュニケーションを通じて生まれる。また、コミュニケーションが存続する限りにおいて社会もまた存続し続ける。

個々人はこうしたコミュニケーションを通じてある一定のパースペクティブを共有するようになるが、どのようなコミュニケーションでも良いというわけではなく、共通のコミュニケーション・チャンネルを通じたコミュニケーションでなければ、そうした共有はあり得ない。

この発想をシブタニは、大衆社会の分析に適用しようとしている。

*18 「ターナーは、集団が判断の形成に関与するようになる場合のいくつかのあり方を挙げているが、各々が異なった言葉をもって分類されるべきであることは言うまでもない」(1962,p.134)、とする、シブタニが引用するターナーの見解は、シブタニの第三の視点をさらに発展させる可能性を持っている。この点については、ターナーの次の文献をもとに、別の機会に検討したい。Turner,R.H.,1956,"Role Taking,Role Standpoint,and Reference Group Behavior",American Journal of Sociology,61:316-328.

相対的に孤立した社会に関する彼らの研究において、人類学者達は、地理学の用語で「文化的領域」のことを有意味に語る事ができる。そのようなコミュニティにおいては、各々の文化は、ある一定の領域的基礎を持つ。というのも、一緒に住んでいる人々だけが相互作用を行うことができるからである。とはいえ、レッドフィールドがユカタン半島における四つのコミュニティに関する比較研究で示したように、文化的領域はコミュニケーション・チャンネルと同一の拡がりをもつ。近代産業社会において、高速移動手段およびマスコミュニケーション・メディアの発達によって、地理的に散在する人々は、きわめて効果的にコミュニケーションすることができる。コミュニケーション・チャンネルは、今日読み書きできない人々でさえもたやすく利用可能なものとなっている。これらのネットワーク〔高速移動手段、マスコミュニケーション・メディア〕は、今や領域的境界とは一致しないため、文化的諸領域は互いに重なり合い、その生態学的基礎を失ってしまっている。隣の人も完全に見知らぬ人であり得る。共通の用語法においてさえ、そのパースペクティブの多様性に関する直感的な認識がある^{*19}。そして、我々は、様々な社会的世界に住む人々のことを有意味に語る。例えば大型金融取引の世界、学会^{*19}、子供の世界、または、演劇界などである（1962,pp.134-135）。

図B参照

*19 例えば日本社会学会の状況があげられる。同じ「行為」という語彙でも、行為論者とシステム論者と相互作用論者ではその意味が異なる。「社会学は、社会学者の数だけある」（村中知子、1996年、『ルーマン理論の可能性』、恒星社厚生閣、9頁）。

	近代以前	近代大衆社会	
社会的 世界	領域的基礎（地理的境界） と 文化的領域（cultural area） が一致していた	要因	高速移動手段 マスメディアを代表とする コミュニケーション・チャンネル
			↓ ↓ ↓
		結果	領域的基礎と 文化的領域が乖離 ・多数の独自の見地の生成 →社会的世界は互いに異なっている。 ・共通の用語と共通のパー スペクティブが一致しないこ とさえある。
社会 統 制 観	領域的基礎＝文化的領域 ＝ social unit social unit の集まりが一つの 「社会」を構成する。 各々の social unit に「社会」 の「中心」から統制が加わ る→社会の存立 ↓ 社会統制＝社会による統制	シブタニの社会統制観 ・・・社会統制＝自己コントロール 「政治権力が中央集権化した全体主義体制の下 でさえ、社会統制は分散されている」(1962,p.132)。	
社会 観	「中心化された社会」、 「成層分化の社会」 ＝パーソンズ流の社会観 ^{*20}	「脱中心化された社会」、「機能分化した社会」 (ルーマン)を彷彿とさせる。	

各チャンネルの多様性

- ・各チャネルは安定性、範囲、効果において異なる。
- ・アクセスの多様性も見られる(シブタニは言及していないが、アクセス可能なチャンネル自体の多様性の存在が指摘される)。



チャンネルへのアクセスの多様性×チャンネル自体の多様性⇒社会的世界の多様性



*20 パーソンズ流の社会観とは、言うなれば官僚制組織に関する枠組みをそのまま社会全体に広げたものと言えるのではないだろうか。(宮本孝二他編、1994年、『組織とネットワークの社会学』、新曜社、第14章；船津 衛、1983年、『自我の社会学論』、恒星社厚生閣、36－45頁。)



各々の社会的世界は異なったものとなる。

各々連帯感の程度が異なる（連帯感が最も強いのがサブコミュニティ）。

世界は構成、規模、そしてそれらの参与者たちの領域的分布においてかなり異なる。局地的カルトのような小さく、人口密度が高いものもあれば、知識人の世界のような広大で、参与者たちが散在しているものもある。多くのエスニック・マイノリティのような相対的に同種の人々から構成されるものもあれば、大半の政党のような全く混ざり合っているものもある。世界は境界の範囲と明確性において異なっている（1962,p.135）。



① シブタニは、社会的世界を三つの指標（構成、規模、領域的分布）で分類している。

（→グラフ参照）

② 「世界はまた、その排他性と世界が参与者たちに要求する忠誠心の程度において異なる。完全に献身的な者に対してのみ開かれた世界もある。すなわち、誰もパートタイムの修道女にはなりえない」（1962,p.135）。

③ こうした世界では、絶対的な地位を持つ社会的世界は存在し得ない。というのも、どの社会的世界も全ての人々をカバーしているわけではないからである。

すなわち、犯罪社会、エスニック・マイノリティ、社会的エリートの集団、または孤立した宗教的カルト。そのようなコミュニティはしばしば、凝離しており、そして凝離は内部における接触を増大させ、外部に対する障壁を強化する。もう一つのよくある世界の種類は、相互に関係した有志団体のネットワークから構成されている。——すなわち、医学の世界、労働組合の世界、鉄鋼業の世界、または、オペラの世界などである。これらは、各々の場所で、組織化された様々な集団によるだけでなく、『Variety』や『CIO ニュース』、そして専門機関誌のような定期刊行物によっても互いに結びつきあっている。教会と友愛会はしばしば独自の出版物を持っている。こうした世界のより組織化されたものの一つに 同業者仲間があり、それは時折、法律が万人に要求するものよりもより厳しい倫理規定を持つ。最後に、緩やかに結びつきあった特別な関心に基づく世界がある。——すなわち、スポーツの世界、切手収集家の世界、または女性の流行の世界などである。参与者達は、彼らが共有している限られた関心によって周期的にのみ結びつきあうので、熱狂的に身をささげるといふ度合いから、何気に関心を抱くといふ度合いまで、関与の度合いには幅がある。通常極めて広範囲にわたって参与は行われるため、スポーツ、ファッション、そして様々な娯楽分野における最新の展開はマスコミュニケーション・メディアの中で伝達され、関心を持つ人なら誰でも容易に利用できるようになっている。もちろん、こうした領域は緩やかにしか組織化されていないが、とりわけ、彼らの関心が強く、持続的であるときには、参与者たちはそれでもなお同様の行為の基準を発達させる。流行を意識している女性達は、彼らの互酬的な称賛において、たやすく互いに認め合うことができる。熱心な釣り人は、彼らの獲物に逃げるといふ勝ち目を与える、という営みを奨励する（1962,pp.135-136）。



旧来からの コミュニケーション・チャンネル	近代大衆社会に特徴的な コミュニケーション・チャンネル
・ダイレクト・コミュニケーション	・マスメディア ・定期刊行物 ・独自の出版物

兵士たち、売春婦たち、麻薬常習者たちの隠語は、エスニック・マイノリティの方言と同様に、より大きなコミュニティの標準言語とは異なり、そしてこれらの言語的差異は、いっそう部外者との社会的距離を際立たせる。各々の社会的世界は規則化された相互反応の世界であり、何らかの機構が存在する領域であり、その機構は他者たちの行動の予想を促進する（1962,p.136）。

図 C、D 参照

社会的世界は秩序だった領域であり、それは各々の参加者が人生を切り開く一つの場として機能する。行為、一連の価値、威信をつかむための階梯、人生に対する共通した見地（例えば世界観のようなもの）。エリートの集団の場合、社交儀礼の発達さえ見られるかもしれない。それは所属する人々に対してのみ維持される。すなわちそこに属していない人は〔ある意味で〕人間以下の存在として斥けられる。すなわち、彼らは行儀の悪い人間として予想される。出世の道筋は組織化されており、通常そこには秩序だった一連の段階があり、それを通じて下積みから成功者へと登りつめていく（1962,pp.136-137）。

社会的世界とは

何らかのパースペクティブを共有している人々の集団であり、その集団が存在している場のことである。それはコミュニケーションの限界によって伸縮自在にその規模を変える。



このシブタニの考え方は、「ネットワーク論」を示唆しているのではないか、と思われる^{*21}。すなわち、社会的世界とは、隙間のない円ではなく、点がコミュニケーションの限界によって結びつけられているものだ、というイメージが提示されているのではないか。

成員選別システム・・・社会化の過程も組織化されている。

社会化の過程を通過した者だけが、その集団の成員とみなされ、通過できなかった者は、ある意味で人間以下の存在とみなされる。

*21 宮本孝二他編、1994年、『組織とネットワークの社会学』、新曜社、第15章を参照。

実際、様々な世界に存在する種々の威信をつかむための階梯は、あまりにも異なっているので、ある世界において成功の極みに達した人がいても、ほかの世界では全く無名かもしれない。各々の世界において、異なった歴史的な適応方針が発展するのであり、特定の重要な過去の出来事が選択的に強調される。共通の記憶は、制限されたコミュニケーション・ネットワークの中で、形成され、強化される。例えば世界をまたにかける登山家の伝承の中には、さる登山家の並外れた勇気と技術、勇敢な救出劇、そして勝ち目のない確率に対する偉大な功績の話がある。ヒマラヤの様々な頂に果敢に挑む人々の意志力は、そのような文脈の中でのみ理解され得る（1962,p.137）。

図 E 参照

多くの意見の相違は、我々の社会においては、次のような事実から生じる。すなわち、同じコミュニティに生活していて、かつ数多くのトランスアクションにおいて協力さえしている人々が、実際には異なった観客に志向しているという事実である。例えば、単科大学の種々の学部における学内の不和は日常茶飯事である。一般教養を専門とする大学に関する研究においてグールドナーは、いくつかの異なる出世の道筋の種類を選り出すことができた。大学のコミュニティに対して強い忠誠心を持っており、様々な大学の活動に対して活発に役割を果たす教授たちもいた。また、行政上のキャリアを追求し、官僚制的ヒエラルヒーの内部において最も昇進しそうなやり方で、自分自身を導いていく者もいた。さらに、各自の専門分野に身を投じている者もいた。企業における技術専門家のように時々「会社 [=大学] の人間」ではない存在とさえ思える者たちもいた。というのも、彼らは過度の指導負担と研究機会の欠如について絶えず不平を言うからである。もちろん、全ての教授たちは表面的には似通った価値に傾倒しており、これらの人々が異なった向上心を持っていること、異なった社会的世界における地位を求めていること、そして実際には互いに理解し〔合っ〕ていないことは明らかである。というわけで、多元的社会において人々が、身近な人々にとって理解不可能な目標を追求することは稀なことではない（1962,pp.137-138）。

図 F 参照

例えば、南部諸州時代に恋焦がれる南部人の人々。例えば中世主義者を挙げてみよう。そのような人々は単に本を通じて彼らが高く評価する時代の見地を習得する。不満を抱いている人々は精神異常者とは異なる。すなわち、彼ら〔目下の現実に不満を抱いている人々〕の想像上のパースペクティブは、一般に視野がより制限されており、そしてそれは、数少ない特殊な活動に従事するときのみ用いられる。また、私的世界と、合意を享有している「現実」の間の違いが、よりはっきりと認識されている（1962,p.138）。



すなわち、精神異常者とそれ以外の人々の区別が示されている。すなわち、前者は上記のパースペクティブを一般的、持続的に用いているのに対して、後者は、特殊的、一時的にそれを用いている、とシブタニは考えている。私的世界と公的世界を峻別した上で想像上の準拠集団を作っているか否か、という基準もまた前者と後者を区別する指標となっている。多元的であるとはいえ、精神異常者の世界と「大衆の世界」を混同してはならないのである。

同調と重要な他者

どの個人にとっても、彼が定期的に関与するコミュニケーション・ネットワークと同じ数だけ多くの準拠集団がある。もちろん、人々は彼らの参与の範囲において異なっている。人は各々、自分が中心に位置している環境で生活している。そして、彼の事実上の環境の諸次元は、ニュースが送られてくる方向、距離によって定義される。さらに、社会的世界の特定の組み合わせは、人によって異なる (1962, pp.138-139)。

近代大衆社会における生活の特徴の一つは、多様な社会的世界への同時的参与である。個人が多くのコミュニケーション・チャンネルに彼自身をさらし得る、その容易さゆえに、彼は、区分された生活を送ることになるであろうし、多くの相互に関連をもたない活動に持続的に参与することになる。さらに、社会的世界の特定の組み合わせは、人によって異なる。これがジンメルをして、次のように断言せしめた事柄である。すなわち、個人は各々独自の組み合わせにある複数の社会圏が交差するその点に立っている、ということである (1955, p.567)。

図 G 参照

「数」	「方向」	「距離」
—メディアの数 —メディアの種類 ・TV ・Press ・Net etc...	—コンテンツの種類 ・ワイドショー ・報道 ・スポーツ ・アニメ etc...	・市内 ・県内 ・国内 ・海外
↓	↓	↓
環境の諸次元の決定 = 社会的世界の組み合わせ		

集団と葛藤

葛藤しない場合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集団が異なっても、価値観が同じ場合 <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <tr> <td style="text-align: center;">兵士</td> <td style="text-align: center;">家族</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">危険な任務に志願</td> <td style="text-align: center;">←—— 心配</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">「勇気」を奨励する、という価値観は同じ</td> </tr> </table>		兵士	家族	危険な任務に志願	←—— 心配	「勇気」を奨励する、という価値観は同じ	
	兵士	家族						
	危険な任務に志願	←—— 心配						
「勇気」を奨励する、という価値観は同じ								
<ul style="list-style-type: none"> ・ ある準拠集団に基づいた行動と、別の準拠集団に基づいた行動が相互に交差しない場合 (E・ゴフマンの「表局域」(front region)、「裏局域」(back region)を参照) 								
<ul style="list-style-type: none"> ・ 独自の適切な行動様式を構築しようとする傾向がある場合 ・・・既存の準拠集団の再構築——自己相互作用 								
葛藤する場合	一時的葛藤	<p>「キリヤンは、次のことを報告している。すなわち、警察、消防士、そして公益事業者は、突然思いがけないジレンマに直面した〔という事例である〕。彼らは、自分たちの家族を気にかけてが、その関心にとどまるといふ失敗を犯していたら交通規制、消火、そして救助、救援作業において遅れが生じ、多くの犠牲を払っていただろう」(1962,pp.139-140)。</p>						
	慢性的葛藤	<p>「とはいえ、そのような葛藤に、自分たちが知らぬ間に慢性的に悩まされている人々もいる。——すなわち、周辺的地位を占める人々などである。移民の子ども、工場の親方、高学歴の女性——は全て、組織立った構造の隙間に生きている。彼らの生活は、分断されているにもかかわらず、マージナル・マンたちの間で個人的不適応は稀なことではなかった。というのも、彼〔等〕がすることは何であっても、彼等はある準拠集団の規範を破らねばならないからである」(1962,p.140)。</p>						

マージナル・マンたち	・ 移民の子ども・・・親の規範と新世界の規範との板挟み ^{*22}
	・ 工場の親方・・・労働者と「元請け」との板挟み
	・ 高学歴の女性・・・伝統的女性観と女性キャリア志向との板挟み

というわけで、↓

何気ない観察でも、それによって、アメリカ人が生活している標準の、驚くほどの多様性が明らかになる (1962,p.138)。

「一人の人間として、私はあなたに同情する。しかし、役人として、私はあなたに慈悲を示すわけにはいかない。政治家として、私はあなたを盟友とみなす。しかし、道徳家として、私は彼が大嫌いである」(1962,p.140)。

→シブタニがジェームズの文献 (『心理学原理』) から引用したもの

*22 例えば、P.クレッシー、『タキシードダンス・ホール』、第4章、第3節 (<http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/dancehall.htm>) を参照。

というわけで、近代大衆社会において人間は、パースペクティブの選択か統合を迫られることになる。

準拠集団の選択を強いる葛藤に直面→こうした状況下では何に基づいて選択を行うか。

①	より魅力的と判断する集団の規範に従う（マートン）。
②	個人が集団からの影響を受ける度合いは、その集団の魅力に依存する（ディッツ）。
③	重要な他者にどういう感情を持っているかによって、状況の定義の選択のあり方が変わる（クーリー、ミード、シブタニ）。

「重要な他者」（significant other）

＝その集団を準拠集団としている人々にとって、その集団の代表としての位置づけを持っている人。

「重要な他者」に個人がどういう感情を持っているか

→その定義を選択するか、そのパースペクティブを選択するか否かが決まる。

どんな特定のパースペクティブであれ、それが用いられる程度は、そうした個人に向けられて発展した感情に依拠する。愛情と考慮を伴って扱われてきたと感じる人々は、たいてい個人的な義務をあらゆる状況における拘束力を持った実体とみなし、それに従わないことが困難だと思っている。しかしながら、感情が否定的なとき、ある人は指導者達の予期を拒絶することによって、指導者達に嫌がらせをするために、道から外れた行動をとるかもしれない（1962,p.141）。

「重要な他者」に関する感情のプラス・マイナスに応じてパースペクティブを採用するか否かおよび採用の程度が変わる。この場合も、「重要な他者」とは必ずしも現に存在する人物である必要はないことをシブタニは強調している。

パースペクティブの変容の多くは重要な他者の変容を伴う（1962,p.141）。

<パースペクティブが変容> → 依存する「重要な他者」の変容を往々にして伴う。

パースペクティブの変容——うまくいった場合——

既存のパースペクティブで自分を維持し得ないとき、人は「重要な他者」の変容という営みを行う。新たに登場した「重要な他者」との関係がうまくいけば、その人は新たなパースペクティブを獲得し、種々の経験を再分類し、新しい自己を形成する（自己の位置づけの再形成）。そのパースペクティブは、その「重要な他者」との関わりにおいて強化される（多くの人々をオウム真理教に走らせたのは、この原理ではなかろうか）。

パースペクティブの変容——うまくいかなかった場合——

うまくいかなかった場合の一例として次のようなものが挙げられる。すなわち、女房を「重要な他者」と見られなくなった男が浮気に走り、新しい女を「重要な他者」とみなすようになった。ところがその女が性悪女で、男を捨て、男の自我は崩壊してしまった。

集団の持続性と重要な他者

重要な他者への感情	社会統制	集団
親密な感情	可能	持続
どうでもいい	不可能	崩壊

→人々の「重要な他者」に対する親密な感情が維持される限りにおいて、シブタニがこの論文を通じて言うところの「社会統制」が可能となり、集団の持続が可能となる。

要約と結論

人間が行っていることを理解するためには、その人間の状況の定義について幾分か理解することが必要とされる。このことは、その人が自明視している事柄について幾分か知ることが必要とする。このことは、とりわけ多元的社会において当てはまり、そこでは、同じ状況に対して様々な人々が〔各々〕異なった観点からアプローチしており、また〔同時に〕一人の個人が様々なトランスアクションにおいて相異なる〔様々な〕パースペクティブを活用している。それ故、演技を行っているある人間にとって誰が観客となっているのかを見極められるかどうかということが、決定的に重要な課題となる。通常観客は、トランスアクションに関与している他者たちから構成されているが、常にそうではない。その場面に直接登場していない観客もまた社会統制を働かせており、そして、準拠集団概念が大衆社会に関する研究においてそのような重要性を負うのは、こうした理由からである（1962,p.143）。

ここから導き出せる命題

- ① 人々は相互に異質な存在である。
- ② 互いに相異なるパースペクティブを持っていると言う意味で、異質な存在である。
- ③ それ故、同じ状況に対しても異なった定義をしている可能性がある。
- ④ しかし、ある人間が持っているパースペクティブは、一つというよりも、複数である場合が多い。
- ⑤ そうした人々がどの状況において、どのパースペクティブを活用しているかは、そこで志向されている観客の如何に依存する。
- ⑥ 人々のパースペクティブを把握するには、観客の特定が必要となる。
- ⑦ シブタニの描く「社会」とは、相異なる複数のパースペクティブが相互に掛け合っている状況を意味している、と考えられる。

疑問に対する回答

疑問	回答
<p>疑問A 「適応」の内実とは いかなるものか？</p>	<p>「適応」とは、多様な準拠集団の中から、ある一定の準拠集団を選択し、その準拠集団を試金石としながら、そのパースペクティブに基づいて行為すること。</p>
<p>疑問B 「他者たちの集団」とは そもそも何なのか？</p>	<p>「他者たちの集団」とは、準拠集団である。準拠集団とは、パースペクティブの獲得源であると同時に行為の試金石（観客）でもある。またそれは、実体的な人々の集まりのみならず、想像上の実体や、パースペクティブに関する言説を意味することもある（「物的・社会的・抽象的対象」）。</p>
<p>疑問C パースペクティブを獲得、 とあるが、どういう風に (いかにして) 獲得するのか？</p>	<p>コミュニケーション・チャンネルへのアクセスの容易さから、人々は複数の準拠集団からパースペクティブを獲得する。獲得された複数のパースペクティブは互いに葛藤することもあれば、しないこともある。</p>
<p>疑問D 方向付ける、とあるが、 どのようにその個人を方向付 けるのか？</p>	<p>パースペクティブの獲得源となった準拠集団を代表する「重要な他者」に対する感情のプラス・マイナスに応じて、その採用の如何が決まる。</p>

文献

- Blumer,H.G.,1969,Symbolic Interaction,Perntice-Hall.
- Blumer,H.G.,1977,Comment on Lewis,Sociological Quarterly, 18:285-289=Hamilton, P.(ed.),1992, George Herbert Mead: Critical Assessments, Vol.2, pp.151-157.
- 船津 衛、1976年、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣。
- 船津 衛、1983年、『自我の社会理論』、恒星社厚生閣。
- 片桐雅隆、1982年、『日常世界の構成とシュッツ社会学』、時潮社。
- 桑原 司、2000年、『社会過程の社会学——ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考——』、関西学院大学出版会。
- Lewis,J.D.,1976,The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism,Sociological Quarterly,17:347-359=Hamilton(ed.),1992,pp.137-151.
- 宮本孝二他編、1994年、『組織とネットワークの社会学』、新曜社。
- 村中知子、1996年、『ルーマン理論の可能性』、恒星社厚生閣。
- 中野正大、宝月 誠編、2003年、『シカゴ学派の社会学』、世界思想社。
- 佐藤 勉編、1997年、『コミュニケーションと社会システム』、恒星社厚生閣。
- Shibutani,T., 1955, Reference Groups as Perspectives, American Journal of Sociology, 60:562-569.
- Shibutani,T.,1962, Reference Groups and Social Control, Rose,A.M.(ed.), Human Behavior and Social Processes, Routledge&Kegan Paul,pp.128-147.
- 山口健一、2005年、『『鏡と仮面』におけるパーソナルな行為者の名づけと用語法の「共有」——A・ストラウスの相互行為論を基礎として——』、『社会学研究』第78号、東北社会学研究会、119 - 136頁。
- 山口健一、2006年、「社会的世界と相互行為の接点—— A. ストラウスにおける集団とパーソナルな行為者の行為との関係から——』、『社会学年報』第35号、東北社会学会、99 - 119頁。